

## 企業&NPO協働アイデアコンテストの5年間

財団法人中部産業・地域活性化センター

総務企画部 榊原 元



第3回コンテストの受賞者、審査員の皆さんと（中央は最優秀賞を獲得したNPO法人全国福祉理美容師協会の赤城理事長と岩岡事務局長）

当財団では、2006年より特定非営利活動法人パートナーシップ・サポートセンター（以下PSC）との協働により、中部地域で活躍するNPO団体などから、企業と協働して事業が進められるアイデアのコンテストを開催しています。去る12月17日には第5回目となるコンテストを開催し、これまでの取り組みの中から新たな協働事業の芽が育ちつつあります。

ここではこの5年間を振り返り、これまでのコンテストの実績や受賞団体のその後についてまとめるとともに、第5回コンテストで最優秀賞を受賞したアイデアについてご紹介します。

### 1. プロローグ

このコンテストの発端は、2006年度に合併前の財団法人中部産業活性化センターが「企業CSR活動の推進支援」をテーマとして調査研究事業を行っていた時に遡ります。当初は、企業とNPOとの協働事業を検討しようとしても両者の接点が少なかったことから、それを打開するために「企

業のためのNPOガイドブック」を作成しようと考えていました。ただ、PSCの岸田代表と検討を重ねていくうち、日々変化を続けるNPOと企業が本音で交流することで相互理解を促進させた方が、ガイドブックの作成より効果的で面白いということになり、急遽「企業&NPO協働アイデアコンテスト」の開催案が浮上してきました。コンテストの進め方としては、NPOから提案された協

働アイデアをコンテスト形式で選び、それに対して助成金を授与するという形態になりました。

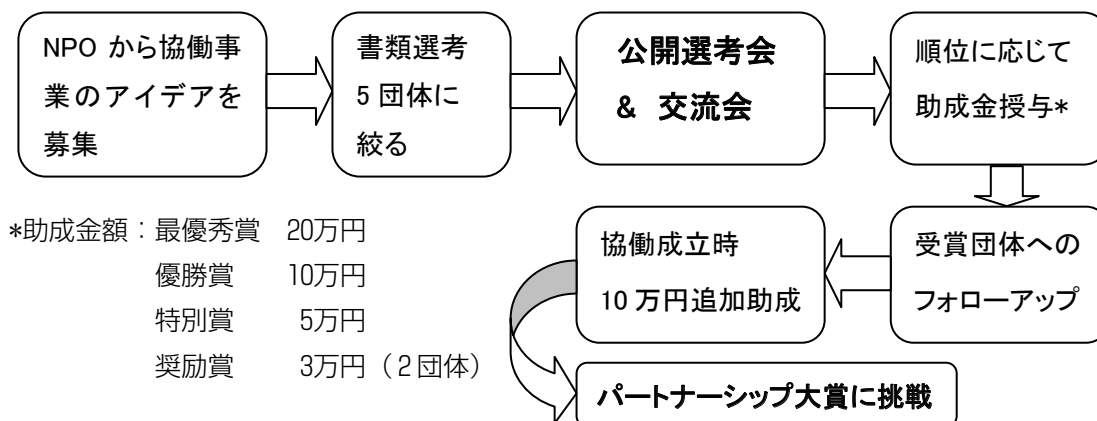
協働相手先であるPSCは、すでに2002年から全国規模でNPOと企業の優れた協働事例を選出し表彰する「パートナーシップ大賞」(以下P賞)を創設し、毎年優秀な協働事例を顕彰する事業を行っていました。当財団としては、この協働アイデアコンテストで優秀なアイデアを選び、そこにパートナーとなる企業を探して協働を実現させ、その後に、P賞に挑戦していくというシナリオを描き、PSCとの協力体制も固まりました。

## 2. 本コンテストの特徴

### (1) 会場の一人ひとりが審査員

審査は、P賞を参考に①協働事業案としての熟成度、②企業のCSR 推進への貢献度、③社会に与える影響度、④実現の可能性と発展性、の4項目について各5段階評価できる「評価シート」を用意し、その合計点で行います。審査は、5名の審査員が行いますが、会場に来られた方も全員、会場審査員として審査に参加していただきます。

### 本事業の流れ



### 実際に使用している「評価シート」

第5回企業 & NPO協働アイデアコンテスト 最終選考会 評価シート(参加者用) <small>審査の参考とさせていただきます。表中の(5-1)に○をお付けください。</small>			1	2	3	4	5
所属	企業・NPO・行政・その他( )	NPO名 (地域名)	(N)悠遊くらん 木海香の里 (三重県)	育児ひろば アプリコット (滋賀県)	(N)近江八幡市 中間支援センター (滋賀県)	ソーシャル ガイド (愛知県)	(N)魅惑的 倶楽部 (静岡県)
団体・ 企業名		協働事業 アイデア名	ヒノキ間伐材を 活用した 滞在型キットハウス 建設	親子ひろば in 住宅展示場	外来魚を利用した 「沖島よその コロケ」の 開発、販売	ウェルカム・ インフォメーション	レッドリボン ブランド
お名前		(配点)					
1	【協働事業案としての熟成度】 単なる資金援助や人的支援にとどまっていないか、 それぞれの役割やメリットが明確か	(5点)	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1
2	【CSR(企業の社会的責任)推進への貢献度】 企業のCSR推進に貢献するものであるか	(5点)	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1
3	【社会に与える影響度】 社会にインパクトを与える斬新なアイデアか	(5点)	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1
4	【実現の可能性と発展性】 実現の可能性はあるか、また発展性はあるか	(5点)	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1
		合計	/20	/20	/20	/20	/20
		順位	位	位	位	位	位

ご協力ありがとうございました。ご記入後、スタッフにお渡しください。

財団法人 中部産業・地域活性化センター(CIRAC) 特定非営利活動法人パートナーシップ・サポートセンター(PSC)

2010年12月17日

## (2) 受賞団体へのフォローアップと追加助成

本コンテストは、事業のアイデアを競うものですが、コンテスト終了後もPSCが協働実現に向けてNPOをフォローします。その後企業との協働が成立した場合には、財団より10万円の追加助成金が授与されます。これまで3団体に追加助成金を授与しました。

## (3) 結果発表を兼ねた交流会を開催

コンテスト終了後、審査結果の発表と表彰式を兼ねた立食形式の交流会を開催しています。企業、NPO、行政の関係者が名刺交換し、軽い食事と飲み物で懇親を深めることにより、協働成立の一助になれば、と企画しているものです。毎回特に、NPOの皆さんが、企業や行政の方々に積極的にアプローチしている姿が印象に残ります。交流会参加者には、事前に「企業」「行政」「NPO」「その他」の4色に色分けしたネームプレート配布し、一目で所属が分かるよう配慮するとともに、過去のコンテスト受賞者にも参加を呼びかけ、近況報告などを行ってまいります。

## 3. 実績と受賞団体（次頁で参照）

### (1) 応募団体数

第1回は13団体の応募にとどまり、全て愛知県の団体でしたが、第4回からは、財団法人中部産業活性化センターと社団法人中部開発センターとの合併により、募集範囲を従来の中部5県から北

陸3県と滋賀県を含めた中部広域9県に拡大しました。増減はあるものの、昨年12月の第5回コンテストには、26団体の応募があり、そのうち愛知県外からの応募が13団体と半数を占めました。入賞した5団体のうち4団体が県外の団体となるなど、徐々にではありますが、本コンテストは中部地域のイベントとして着実に認知されつつあります。この陰には各県の担当部署はもとより県市のNPO支援センターなど中間支援団体・機関による協力があったことは言うまでもありません。

### (2) 参加者数

コンテストの参加者数は、90～100名前後で推移していますが、企業からの参加者はまだまだ少ない状況にあります。NPOの協働アイデアに関連のある企業が参加すればアイデアの実現に向けたチャンスも拡がることから、一社でも多くの企業が参加していただけるよう参加呼びかけを行っています。

### (3) 参加者の満足度、コンテストに対する意見

参加者には、毎回アンケートを行っています。「大変満足」「満足」「普通」「物足りない」「不満」という5段階の評価では、「大変満足」or「満足」とした参加者が、平均で74%を占めています。

また、2008年度に企業に対して行ったヒアリング調査でも「企業とNPOの協働推進に有効」「相互理解の促進に有効」といった意見が多く出されました。



交流会の様子

### これまでの開催内容と受賞団体

第1回	開催日	2007.2.27	最優秀賞	NPO法人Work-Wackパートナーズ
	応募団体数	13団体	優秀賞	名古屋大学大学院環境学研究科竹内研究室
	うち愛知県外	0団体	特別賞	NPO法人トルシーダほか
	参加者	91名	奨励賞①	NPO法人ボラみみより情報局
	うち企業	21社/31名	奨励賞②	NPO法人ドリーム
第2回	開催日	2007.12.4	最優秀賞	NPO法人長野サマライズセンター
	応募団体数	11団体	優秀賞	NPO法人交流ネット
	うち愛知県外	3団体	特別賞	アレルギーっこのつどい「クリスマスローズ」
	参加者	88名	奨励賞①	NPO法人交通事故サポートプログラム
	うち企業	30社/43名	奨励賞②	NPO法人ウェザーフロンティア東海
第3回	開催日	2008.12.17	最優秀賞	NPO法人全国福祉理美容師養成協会
	応募団体数	20団体	優秀賞	NPO法人セカンドハーベスト名古屋
	うち愛知県外	4団体	特別賞	NPO法人ぎふNPOセンター
	参加者	101名	奨励賞①	NPO法人武豊文化創造協会
	うち企業	27社/39名	奨励賞②	NPO法人みえきた市民活動センター
第4回	開催日	2009.12.11	最優秀賞	Momstart Club
	応募団体数	17団体	優秀賞	NPO法人 花*花
	うち愛知県外	3団体	特別賞	八幡酒蔵工房
	参加者	85名	奨励賞①	NPO法人宇宙船地球号を救う会
	うち企業	20社/33名	奨励賞②	NPO法人食・尾張プロジェクト
第5回	開催日	2010.12.17	最優秀賞	NPO法人近江八幡市中間支援センター
	応募団体数	<b>26団体</b>	優秀賞	育児ひろばアプリコット
	うち愛知県外	<b>13団体</b>	特別賞	NPO法人悠遊くうかん木海香の里
	参加者	109名	奨励賞①	NPO法人魅惑的倶楽部
	うち企業	30社/42名	奨励賞②	Social Guide

### 協働アイデアコンテストに対する意見

コンテストに対する意見	ヒアリング先
<b>「企業とNPOの協働推進に有効」という意見</b>	
参加NPOにとっては、プレゼンテーション能力の向上を図るための良い舞台。企業側の参加がさらに活発になれば、協働を推進する場としてより有効。	〈東海ゴム工業〉
NPOの専門性の高さ、企業の基盤的な強さのマッチングに向けた、NPOと企業の出会いの場として有効。	〈伊藤酒造〉
自身が考えたことのないアイデアに触れることによって、新しいものが誕生。コンテストを通じて、地域や社会の役に立てるような事業の種が見つけられる可能性。	〈コミュニティクシー〉
<b>「NPOや協働に関する理解促進に有効」という意見</b>	
コンテストが、企業とNPOが交流し、双方の理解を深められるような場として確立されれば、有意義なのではないだろうか。	〈デンソー〉
NPOとの協働についてこれから取り組みはじめようとする企業にとっては、NPOや協働に関する理解を深められるという点で有効かもしれない。	〈ユニー〉
協働を考える土台として、企業とNPOがお互いの情報を開示し、理解を深め合う場として有意義。	〈山田組〉
自分と違う分野のやり方や他分野のニーズについて「気付く」ことができ、お互いに色々な刺激を与え合える場として、異分野の人々が交流できる場は重要。	〈鶴田商会〉
<b>コンテストの運営に対する意見</b>	
こうしたイベントは継続していくことが大切。	〈コミュニティクシー〉
コンテストという事業の性格上、大賞を受賞したアイデアに注目が集まりやすいという傾向があるとすれば、様々な取り組みを新しく拾い上げて、幅広く応援できるような工夫が施されることにより、さらに意義の大きいコンテストに。	〈山田組〉

(資料)「企業側からみたNPOとの協働に関する調査研究」2009年3月 当財団発行

## 4. 活躍を続ける受賞団体の事例

これまでに入賞した団体の中で、マスコミ等で取り上げられるなど、その後も積極的に活動している団体をいくつかご紹介します。

### ① NPO法人長野サマライズセンター

2007年の第2回コンテストでNPO法人長野サマライズセンターは、「聴覚障がい者が学校の講義などを受ける際に、講師（先生）が発した音声情報を、企業のコールセンター等を活用してリアルタイムで文字情報に変換し、聴覚障がい者（生徒）の携帯電話に送信することにより、コミュニケーションを可能とするアイデア」を提案し、最優秀賞を受賞しました。

その後、長野サマライズセンターは、2008年より国立大学法人筑波技術大学とソフトバンクモバイル㈱と協働して実験を開始しました。2010年からは「モバイル型遠隔情報保障システム普及事業」として実際にシステムを無料配布（ハード購入や通信費は有料）しており、聴覚障がい者を学生として受け入れている大学9校が本システムを導入済みです。現在、障がい者の就労支援を行う企業からも引き合いが来ているそうです。

また、2010年11月に開催された第7回パートナーシップ大賞（PSC主催）においてグランプリ（大賞）を受賞しました。

### ② 名古屋大学大学院環境学研究科竹内研究室

2007年の第1回コンテストで、名古屋大学大学院環境学研究科竹内研究室は、「名古屋市内の放置自転車を使い、都心部での移動手段として有料で貸し出す『名チャリ』プロジェクト」を提案し、優秀賞を受賞しました。

その後、名古屋市がこのアイデアを取り上げ、2009年10月には無料自転車300台、30カ所のステーション（貸出・返却場所）を用意し、2か月間の大規模な社会実験を行いました（登録者30,794人、貸出回数98,846回を記録）。名古屋市は、2009年度には緊急雇用対策費9,000万円を含む9,770万円

で事業を実施しました。現在2012年以降の本格実施を前に、有料とした場合の社会実験や金山エリアでの社会実験等が順次行われています。

### ③ NPO法人ボラみみより情報局

2007年の第1回コンテストで、NPO法人ボラみみより情報局は、「ボランティアをしたい人とボランティアを集めたい団体の双方が、インターネットを通じて出会う『マッチングシステム』を、企業と共に開発するアイデア」を提案し、奨励賞を受賞しました。

その後、2007年4月にマイクロソフト社日本法人が主催する「NPO協働プログラム」の支援対象に採択され、助成金300万円を受けてマッチングシステムを開発しました。本システム（愛称「みみライン」）は汎用性が高く、運用実績も評価されたことから、2010年度に再度マイクロソフト社の支援を受け、現在セキュリティ強化等プログラムの改善を行っています。既に名古屋市社会福祉協議会や京都市のNPO法人が本システムを採用しており、市民活動の重要なインフラとしての拡大が期待されています。

### ④ NPO法人全国福祉理美容師養成協会

NPO法人全国福祉理美容師養成協会は、加齢・障がいにより寝たきりになるなど、外出が困難な人への理美容の訪問サービスを行っています。2008年の第3回コンテストでは、そうした訪問サービスでの体験を元に「訪問理美容専用のシャンプー台、シャンプーハットの開発・販売事業」を提案し、最優秀賞を受賞しました。

その後、PSCの仲介等により大手メーカーやドラッグストアなどに提案を行いましたが、アイデア実現には至りませんでした。しかし、それまで長年に亘り続けてきた理美容訪問サービス、看護師へのシャンプー指導やエンゼルメイク（死化粧）講習などが評価され、社会貢献支援財団の2008年度社会貢献者表彰を受賞しました。また、2010年9月からは、東海ゴム工業㈱との協働で老人介護施設に入居している女性に化粧や若々しい髪型・

ファッションを施し笑顔を与える「ビューティーキャラバン」を展開しており、2010年11月に開催された第7回パートナーシップ大賞（PSC主催）においてパートナーシップ賞を受賞しました。

#### ⑤ NPO法人ぎふNPOセンター

2008年の第3回コンテストで、NPO法人ぎふNPOセンターは、「岐阜県内の使用済ペットボトルキャップを再資源化ポストに集め、県内のリサイクル業者に売却し、その代金をポリオワクチンに換えて世界の子どもたちを救おうというアイデア」を提案し、特別賞を受賞しました。

その後、県内のリサイクル業者との協働が進展し、現在2社と協働して毎月1トン（ボトル換算で48万本）年間約12トンのペットボトルキャップが回収されています。回収から得た資金は全額「世界の子どもたちにワクチンを」日本委員会に送られ、子どもたちのワクチン接種に使われています。

## 5. 第5回協働アイデアコンテスト 最優秀賞受賞アイデアの紹介

昨年12月17日に開催された第5回協働アイデアコンテストの中から最優秀賞を獲得した滋賀県のNPO法人近江八幡中間支援センターのアイデアをご紹介します。

### 外来魚を利用した「沖島よそものコロッケ」の開発、販売

NPO法人近江八幡市中間支援センター  
まちづくり協議会支援員 山本 美枝

#### ① 沖島とは

琵琶湖のまんなか浮かぶ沖島は近江八幡市の島。淡水湖上で人が住んでいる島は日本だけでなく世界的にも珍しく、国内では沖島だけ、世界でも4つしかありません。古くは保元・平治の乱（1156～1159年）で源氏の落武者7名が山を切り拓き、居住したことが始まりといわれています。

島の面積は1.5km<sup>2</sup>と小さく、自動車は1台もなく、島民は徒歩や自転車などで島内を移動しています。本土の近江八幡市とは10分ほどの定期船で連絡できますが、漁業を営む人が多いため、ほとんどの世帯で船を所有しています。島民はみんな顔見知り。家の鍵をかける必要がなく、アットホームな環境が築かれ、騒音がない静かな暮らしをしています。ピーク時800人を超えていた人口は、現在約360人ほどに激減しました。その最大の要因は漁業の衰退です。かつては年間10,000トンもの漁獲高がありましたが、現在は10分の1まで落ち込み、漁業で生計を立てることがだんだん難しくなりつつあります。琵琶湖の水質汚染が進み、外来魚がどんどん増殖した事が原因です。特にブラックバスやブルーギルといった外来魚は、琵琶湖固有の在来種の魚を捕食し、猛烈な繁殖力で増え続け、その生態系に悪影響を与えています。県をあげてその対策に取り組んでいますが、いつになったら問題が解消されるのか見当もつかない



琵琶湖に浮かぶ沖島



沖島漁港

状態です。その結果、若者は漁業に魅力を感じなくなり、島から本土の近江八幡市等へ流出し、少子化が急速に進んでしまいました。現在、小学生は全校でわずか10名。前述した世界で4つしかない淡水上の有人島の中で小学校施設を備えるのは唯一沖島だけ、という貴重な小学校が廃校の危機に瀕しているのです。島の人たちの切実な願いは“漁業を続けていく”こと。そして“沖島の魅力をたくさんの人に知ってもらう”こと。なんとか島の人たちの想いを実現し、世界に1つの宝島である沖島を衰退から守りたい。そんな気持ちがきっかけとなって生まれたのが“沖島よそのコロッケの観光地での販売”です。外来魚を廃棄するのではなく、資源、宝物へと変え、島の活性化へつなげたいというのが今回の企画のはじまりなのです。

## ② アイデアのきっかけ

これまでブラックバスなどの外来魚は、“生態系破壊”“食べられない”といった負のイメージが先行していました。では捕獲されたブラックバスの末路はどうか、という廃棄されるか“粉末にして肥料になる”とのこと。外来魚に注目して資料を収集してみたところ、“駆除のための外来魚釣り大会”というイベントはありますが、釣られた後のことはよくわかりませんでした。外来魚とはいえ、命あるもの。何かに利用することはできないだろうか、と考えていました。そんなあるとき、沖島で“うなぎ祭り”というイベント

が初めて開催されると聞き、足を運んでみると、うなぎとは別に、試作品として“外来魚（ブラックバス）のコロッケ”が婦人会のみなさんの調理により出品されていました。恐る恐る食べてみると“美味しい”ではないですか。白身魚のフライのような、ポテトコロッケのような…。それまでのブラックバス＝まずい、というイメージが払拭されたのと同時に、なんとかこれを広めて沖島の資源にできないかと考えはじめました。

沖島が所在する近江八幡市本土は、知る人ぞ知る観光名所です。近江商人屋敷などの古い町並み、八幡堀、豊臣秀次の城跡やロープウェーといった観光スポットがあり、年間250万人もの観光客が訪れます。時期によっては休日だけでなく平日でも、駐車場は大混雑しています。

あるとき、観光地に立地する町屋カフェに立ち寄って店のオーナーと話をしていたときのことで

「みなさん、有名和菓子店や神社、お堀などの観光スポットを見に来られるけれど、本当に町歩きを楽しんでいるのだろうか。知らないうちに通



八幡堀



町屋カフェ

り過ぎているが、琵琶湖の魚を扱う老舗の佃煮屋や細い路地にある昔ながらの商店など、うろうろするともっとおもしろい発見がある。気軽にスナックを片手にぶらぶらと町歩きすると、もっと楽しいのに…。」

このとき、“沖島の外来魚コロッケ”を老舗の佃煮屋さんや小さな喫茶店など、観光地内で販売して気軽に食べてもらう、というアイデアが生まれました。近江八幡市内だけでなく、観光客にも沖島の存在を知ってもらい、外来魚を美味しく食べてもらう、そして近江八幡市の観光振興の促進という、さらなる利点につながることを期待した企画が誕生したのです。

### ③ 協働のしくみ

今回の協働の仕組み（関係者のニーズと役割）を示したものが下の図です。“外来魚の有効活用”だけでは事業は継続できません。コロッケを観光地で販売するのであれば、やはり味が命。そこで、魚料理をよく知る専門家＝お寿司やさんに味の開発をお願いしてはどうか、と考えました。近江八幡市には郷土料理をメインとした料亭『ひさご寿し』というお店があります。その料理長はお寿司だけでなく、地場野菜“北ノ庄菜”の地域ブランド化プロジェクトにも関わるなど、地域の食材開

発に強く感心を持たれていることもあり、今回の企画を協働ですすめてもらえないかと提案し、快く引き受けてくださいました。

試作を重ねて完成した現在のコロッケは、ジャガイモをベースに魚のすり身と玉ねぎを加えて揚げたものです。揚げたては臭みもなく大変おいしいのですが、少し時間がたつとパサパサとした感じと若干の魚臭さが残ってしまいます。更に改善を重ねて、冷めても美味しく感じてもらうにはどうしたらよいかを今後もっと追求していきたいと思っています。

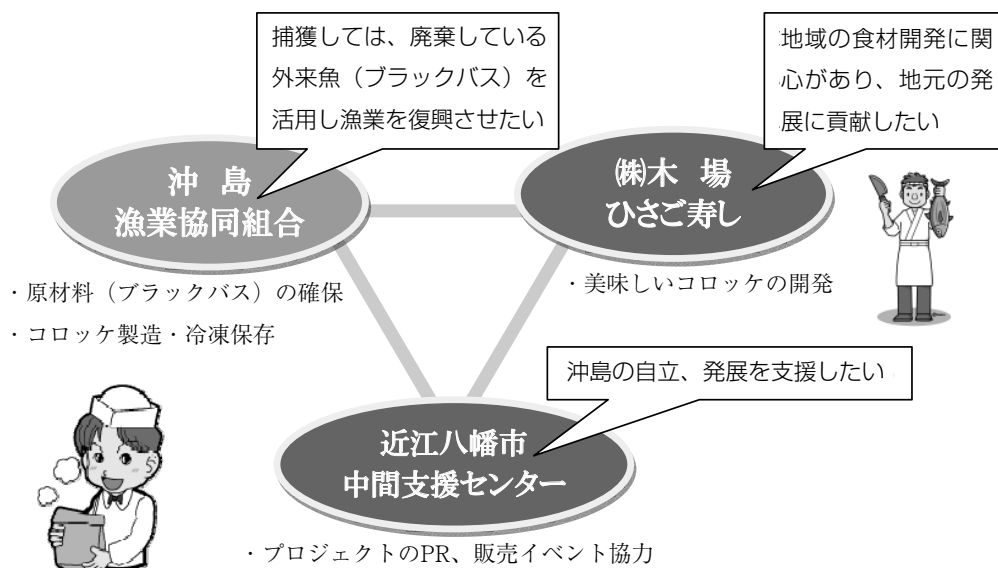
### ④ 沖島よそのコロッケ企画 販売具体案

コロッケの材料はブラックバス、じゃがいもな



完成した沖島よそのコロッケ

### 関係者のニーズと役割





どの具材、パン粉、油などです。もしたくさんのコロッケを作ってブラックバスの供給が追いつかなければどうするのか、と疑問視する声もありましたが、沖島漁協組合長によれば、琵琶湖のブラックバスをどんなに捕り続けてもいなくなることはまずないので心配はない（うれしいよううれしくないような話ですが…）、とのこと。具材についても、“ポテトコロッケよりクリームコロッケのほうが合うのでは？”という声も上がり、“クリームに豆乳やおからを使ってはどうだろう”というアイデアもあるので今後の改良の中で検討していく予定です。特に、おからは、大豆から豆乳を搾った後のカスで、産業廃棄物として扱われており、簡単に廃棄できず家畜のエサなどに利用されているだけなので、利用価値は高いと考えています。

まずは、沖島で捕れた新鮮なブラックバスをすり身にして、沖島の婦人部“湖島婦貴（ことぶき）の会”が、具材と混ぜて油で揚げる直前の状態で冷凍保存します。これを本土の近江八幡市の観光地で販売するのです。候補に挙がっているのは『近江佃煮庵 遠久邑』、『国民休暇村』、『逢味庵』の三店舗です。

『近江佃煮庵 遠久邑』は沖島の漁師から直接佃煮にする魚を仕入れていることもあり、沖島の発展のために一緒に活動してくれることを期待しています。また、店舗の正面に“小幡町観光駐車場”があり、観光バスを利用して当地を訪れる旅行者は、先ずここに降り立つため、観光客へのア



近江佃煮庵 遠久邑（おくむら）

ピール度が高いと思われます。

『逢味庵』は駅から徒歩10分くらいに位置する蕎麦屋です。近江八幡市を訪れる観光客は、ウォーキングも兼ねて駅から旧市街地まで30分ほどかけて歩いていくことも多く、『逢味庵』はそのメインルートの途中に位置します。ここで出来たてのコロッケを買ってもらい、町歩きを楽しみながら食べてもらうのには、とてもよい立地です。

一方、『国民休暇村』は旧市街地ではなく、少し離れた琵琶湖側にあり、利用客は、バスや自家用車を利用するため、コロッケを食べながら町歩きを楽しむ、というわけにはいきませんが、館内のレストランには地元の名物である“赤こんにゃく”や近江牛を使った加工品などを販売しており、ブラックバスを使った沖島のコロッケには興味を示してくれるのではないかと考えられます。また、この『国民休暇村』から沖島行きフェリーが出る堀切港まで近いため、興味をもっていただいた観光客の方々に、すぐに沖島へ足を延ばしてもらえ、という利点もあります。

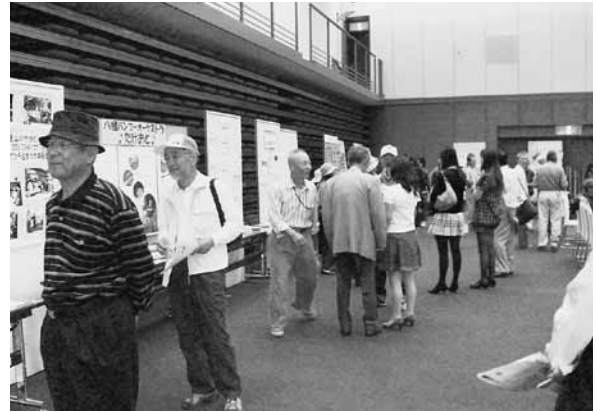
店舗販売以外では“イベント販売”も重要です。近江八幡市には“左義長祭り”“八幡まつり”“てんびん祭り”“八幡堀まつり”“農業祭”“あづち信長祭り”といった祭りが数多くあるので、これ



逢味庵（おうみあん）



国民休暇村



つながり広場2010



八幡堀まつり

らの祭りで積極的にコロッケを販売していく予定です。また、当センター主催の市民活動団体交流イベント“つながり広場”にも出店してもらえれば、と考えています。

### ⑤ さらなる沖島の進化を目指して

前述のように沖島の大きな課題の1つとして人



おきしま資料館

口流出があります。若者が本土へと流れてしまうのです。“漁業の衰退”に伴う雇用環境の悪化が主因の一つですが、島が時代の流れから取り残され、若者にとって魅力ある島でなくなっていることも一因と考えられます。

そこで、「沖島よそのコロッケ」が軌道に乗った後、次のステップとして「外来魚（よその）ハンバーガー」を沖島で販売できないだろうか、と考えています。現在、沖島には古民家を利用して、かつての島の暮らしを展示した「おきしま資料館」があります。ここに喫茶スペースを作り、地元の学生をアルバイトとして「外来魚（よその）ハンバーガー」を販売します。さらに、隣接した『沖島コミュニティセンター』の職員に、沖島の歴史や民話を語る“かたりべ”となってもらい、観光客をひきつける、といった構想です。

また、本プロジェクトが軌道に乗れば近江八幡市内の小学校の給食メニューに追加することも可能ではないでしょうか。ある調査によれば、ブラッ

クバスは、鯛と比較して脂質が10分の1、カロリーは半分以下で、消化吸収を助けるアミノ酸、タウリンが3倍含まれているとのこと。滋賀大医学部附属病院では2008年に病院給食として提供したこともあるのです。

## ⑥ 私たちのねがい

男性も女性も、年齢も関係なく漁業を営む沖島。沖島の漁師は滋賀県に、いや日本に、世界に誇ることがあります。それは、彼らが外来魚を捕るからこそ、琵琶湖の環境が守られている、という事実です。漁業が衰退している、といわれて久しいですが、このまま衰退の一途をたどり、万が一漁業がなくなってしまうと、琵琶湖は大変なことになると思います。今回の企画は、「この事実気づいてほしい」という気持ちからも、ぜひ成功させたいと考えています。

沖島の人たちは言います。「とにかく、できるだけたくさんの人に沖島を知ってほしい。沖島にきてほしい。そしてこの良さをわかってくれた人に、できることなら定住してほしい。」と。沖島を訪れたことがある人ならわかると思いますが、一見、“なんにもない島”です。しかし、じっ



島には車がないので自転車並び

くり島を知れば知るほど、他にはない貴重な資源、忘れられた人づきあいがあります。この、世界に1つだけの島を廃れさせてはいけません。無人島にしてはいけません。今、ここで私たちが知恵を絞る、なんとかしなければいけない。沖島はそれほど価値のある島なのです。だが、島民自身も自分たちのいる場所の良さに気づかないのは、他のどの地域の場合と同じだと思います。よそのものである島外の間人が一緒に関わることが内部の気づきにつながるのではないのでしょうか。島の人たちには、“こんななんにもない島で何かやってもしょうがない”というあきらめに似た気持ちが見え隠れしています。ここで、新しい企画を始め成功させることで、漁業だけでなく沖島に住んでいるということに自慢するくらいになってもらえたらと思います。

## ⑦ おわりに

今回企画をしたNPO法人近江八幡市中間支援センターは、市民活動団体支援の一環としてまちづくり協議会支援を行っており、沖島地域の活性化支援もこの中に含まれています。

そのため、事務所に“沖島支援員”を配置し、島民と密にコンタクトを取り、情報収集をしています。当初は中間支援センター職員の訪問にとまどい気味だった島民も、足繁く島を訪問することで徐々に打ち解け、協力体制が築けるようになってきました。

また、当センターは市民活動団体のみならず、



沖島漁協活動風景

企業との協働にも力をいれています。中間支援の“中間”とは、「行政と住民、そして企業の三者をつなぎ、地域をよりよいものにしていく」という意味があります。今回、この“企業&NPO協働アイデアコンテスト”を知り、そのコンセプトに共感して本提案を企画しました。世界でただ一つの島「沖島」を一人でも多くの方に知っていただき、何としてもこのアイデアを実現させたいと思っています。そして我々中間支援センターの職員一同、島の皆さんと一丸となって邁進していきたいと考えています。



当センター事務所スタッフ（前列左が筆者）